

学長挨拶



鳥巢 義文
(南山大学・学長)

皆さん、こんにちは。今日は寒い中、外を歩いて来られて本当に大変だったと思います。私もパッヘスクエアを横切るだけで、ウーツとなってしまいました。

南山大学人類学研究所設立70周年記念シンポジウムということでお越しくださり、本当にありがとうございます。一口に70年と申しまして、一つの事業をこれだけ長い年月にわたって継承し、また発展させようとこれまで関わってこられた研究所関係者の方々には、いつも幸いな成功事例ばかりではなく、さまざまな難問あるいは壁に直面された経験もおありなのだろうと思います。

本研究の歴史を私自身の人生に絡めて、ごく簡単にたどってみます。1946年設立の南山外国語専門学校を前身とする本大学が、3年後の1949年に、パッヘ学長の下、文学部1学部で新たにスタートを切った際に、本研究所は「人類学・民族学研究所」という名称で開所されています。このとき、もちろん私はまだ生まれていません。

その後、私が生まれた1954年には、昭和区五軒家町の旧ピオ館の中にあった研究所が「人類学研究所」という名称になっています。また、私が南山大学へ入学した1973年になると、当時のヒルシュマイヤー学長の下で研究所の改組が検討されるようになったと言われています。この折に、人類学博物館が人類学研究所から独立しています。

神言会会員でありドイツのアントロポス研究所の創立者でもあるウィルヘルム・シュミットとの交流の中で生まれた人類学研究所は、70周年を迎えました。果たしてその足跡はどのようなものであったか、また、これからどこへ向かおうとしているのか、この後、お話しくださる3名の発表者の登壇を興味津々の思いで待っているのは私だけではないと思います。

それでは、私のご挨拶はここまでとさせていただいて、マイクを渡部研究所長にお渡ししたいと思います。ご清聴ありがとうございました。